

第3回福島ダイアログセミナーでは、消費者、生産者、流通業者などから、さまざまな発言がありました。すべてではありませんが、内容の重複を避けずに、ダイアログセミナーの様子を知ってもらうための参考に発言を整理しました。

現状の問題点・問題意識

- ・ 消費者に正確な情報が伝わっていない（消費者）
- ・ 鼻血、生理不順などが放射線のせいとされるなど情報にふりまわされている（消費者）
- ・ 生活に使える単位が多く、空間線量と産地の食品汚染レベルを短絡的につなげて考える傾向が見られる（消費者）
- ・ 数字を下げるのが本質ではなく、笑って暮らせること（消費者）
- ・ もともとエビデンスを考えない人には納得できない、数値の理解をどう修正していくのか（消費者）
- ・ 一般人の多くは正しい知識で行動できているが、一部の信じてもらえない方をどうすればよいか（消費者）
- ・ ある地域では喫煙者が多く、家庭内での喫煙に対する問題意識がない（消費者）
- ・ 農業の復興は20年以上かかるかもしれないが、生産者は短い期間での復興を期待している、消費者と生産者の思いが一致しなければ復興は難しい（消費者）
- ・ 農業の復興が遅れるほど、土地が荒廃してくることが心配（消費者）
- ・ 数値のでてない食品を食べてもらうためにも、数値でないアプローチが必要（消費者）
- ・ 漠然とした不安、4人のこどもがいる、毎日の生活におわれている（消費者）
- ・ 福島県のはあぶないといわれるが、茨城や栃木のほうが心配、福島はしっかり測定している 国や県の情報を信じなくなったら、ストレスになります。自分たちが信じて県産品を食べていかないと風評被害がなくならないと思っている（消費者）
- ・ 平常時1mSv、絶対守らなければならないという誤解（消費者）
- ・ 被ばくの科学、正しい情報が届いていない、関心をもって対応する（消費者）
- ・ 小規模農家の産物は測定しているのか疑問、すべての生産物にベクレルを記載すれば、福島産のものと比較して食べられるかもしれない（消費者）
- ・ 喫煙者である、我が子はお母さんの喫煙のほうがあぶないという（消費者）

- ・ 自分の判断で大丈夫と思うのを食べている、米だけは不安をぬぐえない、中学生、高校生のこどもには県外の米を買って食べている（消費者）
- ・ みんなが食べているから大丈夫なのかと思っている、こどもたちの影響に対して不安、確定的なものが見えないので不安（消費者）
- ・ この土地で流れに乗って生きていくしかないという諦めの気持ち（消費者）
- ・ 食品からの被ばくは抑えたい、食品を公民館で測定できるようになったが、川海のものはどうなっているのか気になっている（消費者）
- ・ 20Bq/kg 以下だとしても、ほうれんそう、じょうがいもの重さが違うので買うときに参考になる表現がほしい（消費者）
- ・ レベルが低いとわかっていても、初期の汚染のイメージが強く、地場産の野菜がなかなか食べられない、県外のものを買っている（消費者）
- ・ 数値を信用してこなかったのは、原子力とつながっている、お金につながっているという疑念があったからではないか（消費者）
- ・ 信頼の構築がポイント、なぜ安心につながらないのか、情報が遅い、情報が難しかった、政府も科学者も信じられない、隠しているのではという疑念がある（消費者）
- ・ 情報公開の方法のあり方、基準値の設定が適切でない、測定も適切でない、情報発信の責任の主体が法律（消費者基本法）に明記されていることを自覚すべき（消費者）
- ・ 100Bq/kgになって安心になっているようだ、従来の暫定基準の説明に問題があったと理解している（消費者）
- ・ 学校で放射線教育が開始し、一般のことは教えることができるが、福島で何を教えるか（学校）
- ・ サイエンスと倫理の問題、安全と安心の問題は難しい（学校）
- ・ 8人給食を食べていなかったのが今は1人だけに減った（学校）
- ・ 内部被ばくは怖いと考えている人が多い、100Bq で安心と考えていない人もいる（消費者）
- ・ 自分の数値がほしかった GM に入手したくてもできなかった（消費者）
- ・ 生産物がどのくらい汚染しているか知りたかった（消費者）
- ・ 500Bq を 100Bq に下げたことの科学的根拠は何か？ イオンがゼロにするなどの動きと無関係ではない（消費者）
- ・ 100Bq の基準値はとまどい、現場の体制ができていなくて混乱（生産者）
- ・ 15 台で自主検査している 生産者ごと、品目ごとに測定、97%以下が検出限

- 界以下、ほとんどが 20-30Bq 以下（生産者）
- ・ 大手量販店は福島産を扱うのを嫌う、中規模の流通店は扱う、数字だけが一人歩きすることが問題（生産者）
 - ・ 洗って食べている、自分が作ったのは大丈夫としたい（生産者）
 - ・ 桃、梅を除染して、今年の産物がでないことを願っている（生産者）
 - ・ 消費者は、政府の基準値を信じていない、基準値以下でも信じない、検出限界以下、ゼロリスクを求める（生産者）
 - ・ 限度値以下、ND以上のときでも販売するが、数値は公開していない、風評被害を生むから（流通業者）
 - ・ 低線量問題は人のところが分断されることが最もこわい、外部被ばくは理解が進んだが、内部被ばくは、ベクレルとシーベルトとはどういう関係にあるのかわかりやすく説明できないでいる（メディア）
 - ・ 情報弱者にはWBCはわからないが、噛み砕いて伝えていく丁寧な説明、きめ細かい情報提供が今後の課題（メディア）

否定的な展望と肯定的な展望を考える

- ・ 援助疲れは悪いシナリオで、良いシナリオは、これを契機に NPO など新しい形で活気が生まれること
- ・ 生産者はがんばっているのに消費者が悪い、互いの不信感が続くのが悪いシナリオ
- ・ 福島はがんばっていることを伝える努力が必要
- ・ JA が細かく測定していることに安心した、これだったら子どもに食べさせられる
- ・ 被ばくによる健康被害をストレスと決めつけしないで20万人と限らずに検診をしてほしい
- ・ 食品の検査体制のさらなる充実は安心できる
- ・ 生産者を信じて食べるべきだと思う、神経質にならず、最小限の知識をとりいれて生活したい、子どもと一緒に考えてみたい
- ・ 子どもの健康、何十年先の健康状態に対する不安、甲状腺検査の定期検診による安心を得たい
- ・ 国家プロジェクトとして風評被害に対峙する必要がある
- ・ 自分の行動がまわりを変えると考えている
- ・ 子どもの差別を恐れ、出身地を言えない、結婚差別など若者が抱いている思

- い、健康手帳は広島長崎と同じ差別の恐れでだしてほしくない
- 生活の近くで気軽に食品を測定できるようにしてほしい
 - 見えるデータ化する、ある山菜はND、すべての山菜がNDではない、検査をしているからわかったこと
 - 父は戦争よりもひどい、戦争は終われば平和がくるが、この状況はいつ回復するかかわかならい、国は国民と一緒に行動することが大切、去年は怒りが大きかったが今年は前向きに行動する年
 - 3-4年でNDが続けば信頼は回復すると予想、ブランド品は失われた、しばらく時間がかかる
 - 生産者が高齢化、後継ぎ問題、生産にチャレンジしていくためには地域振興策が必要 2-3年が重要な時期
 - 正しい知識を理解することが大切、将来も風評はなくなる、1、2年で解決しないであろう
 - 避難者と地元民が解け合っていない、補償金をもらっていることが生活の乱れを招き、それが子どもに影響しているようで気になる
 - 誤解をとく情報を流してほしい
 - 悪いシナリオは、生産意欲がなくなり、離農し農地が荒れて環境問題となる
 - データは比較するデータ（震災前など）がないと解釈できない、Bq/kgではなく、サクランボ kgではなく、食する量でBqを提供していくこと
 - 作って食べるという基本的な問題に直面している、生産者と消費者と一緒に話をするのが大切
 - 自分自身の問題だから、自分自身で管理することが重要、放射線のものさしを住民が決める
 - 不安に思うのは科学のレベルではない、その不安の理由を解きほぐすことを考えるべき、生産者と対話、自分での測定がひとつの解決法
 - 良いシナリオは、汚染レベルの改善、消費者に受入れられる、悪いシナリオは、昨年度の稲藁のように数値の高いものが報道される、加工品に心配がある
 - 福島県いわき市小名浜港で水揚げされたカツオは、農水省のHPにアップしてメディアが報道後、消費につながった
 - 福島のフルーツは最高のブランドであった、原料として使い続ける、しかし福島農園の名前はマーケット上使えない、それまでは努力するのがアクションプラン

- ・ 栄養士、保健師が放射線防護を子どものときから教えてほしい、そうでないとそれを食べたら死ぬという誤解まである、安全だから福島においてということを広げていきたい
- ・ 流通業界には継続して情報を提供してほしい、住んでいるところで除染が開始されるが、除染後どのくらい下がるか関心をもっている
- ・ 夫と考えは違うが食べているものは同じ、自分なりの物差しをつくる必要があると考えている
- ・ 食べるかどうかの選択は消費者、そのための検査情報の提供をやるべき
- ・ ダブルスタンダードにならず、一貫した情報提供が必要
- ・ 記憶の半減期はあるが、忘れるべきは根拠のない恐怖・不安、事故による教訓は忘れるべきではない
- ・ メディアや政府の情報の見せ方が重要、国が公表しているとしても消費者に届いていない、マインドを変えるところまで努力してほしい
- ・ 首都圏の消費者は無関心層が多い、大変不安に思っている人がひとにぎり、ひとにぎりの人が決めることにならないための多くの人に関心をもつ必要
- ・ 無関心層にモチベーションをあげるにはどうしたらよいかを考えている、科学的な判断ができるような教育していくこと、バランスある考えがもてる教育が大切
- ・ 消費者と生産者というだけでは相互理解が進まない、顔が見える関係性を作っていく、ものさしをつくりたいと活動している
- ・ 最終的には個人で判断すること、そのプロセスでは知識がほしい、その手伝いをしたい
- ・ 食卓が2膳あってもいい、無理にひとつにすることは却ってよくない、精神的においつめることになってしまう、ICRPは連帯を強調するが、無理じいをするとは差別と分断が生じる、ジャックがいうように、それぞれ判断して選択できることがベスト
- ・ 話を聞くことの大切さ、見てもらうことの大切さを知ること
- ・ 考えるための材料、情報を提供するかがメディアの役割、生産者の努力、支えるための活動が必要
- ・ 自ら測定して、自ら評価することで信頼につなげる行動を続ける
- ・ 対策は行政単位で行われている、汚染の実態と一致しない、公民館などの測定できる体制の構築

以上